

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- 01 10代とともに 昆虫はもっとも身近な野生動物
- 04 2023 今年もアツアツ国際交流！ PHOTO 速報
 - ・北米交流、オレゴン国際キャンプ
 - ・韓国交流
 - ・ニュージーランド交流
 - ・海外青少年受入れ
 - ・ラボ高校留学 第35期帰国／第36期出発
- 10 東京言語研究所 公開講座
言語の進化～階層性と意図共有にもとづく仮説と実証
新インターン紹介
- 11 Go Ahead! 埼玉県・岡村彩希氏／Information



桜井奏（高1／神奈川県・田辺厚子P）2023年ユタ州参加

Giggling Twins!

伝わりとうれしい，わかるとおもしろい！

10代とともに

井手 竜也

Tatsuya Ide

1986年、長崎県出身。国立科学博物館・動物研究部・陸生無脊椎動物研究グループ研究員。宮崎大学農学部を卒業したのち、九州大学大学院に進学し、博士(理学)を取得。九州大学大学院・比較社会文化研究院特別研究者、森林総合研究所特別研究員を経て、2017年より現職。専門はタマバチ科の生態や分類など。国立科学博物館を中心に各地で開催された特別展「昆虫」「大地のハンター展」「毒」では監修者のひとりとして活躍。著書に『昆虫学者の目のツケドコロ：身近な虫を深く楽しむ』（ベレ出版）、分担執筆に『寄生バチと狩りバチの不思議な世界』（一色出版）、『森林と昆虫』（共立出版）があるほか、『ぐんぐん考える力を育むよみきかせ むしのお話20』（西東社）など児童書の監修も務める。読売中高生新聞(読売新聞社)では「科学トラベラー」欄の執筆も務めている。



昆虫はもっとも 身近な野生動物

どんな子ども時代を過ごしましたか？

子どものときから生きものは好きでサワガニやハムスターは飼っていましたが、さほど昆虫好きだったわけでもなく、中学までは野球に打ちこんでいました。ゲームで遊ぶのも好きでした。ところが高校生になって生きもの好きが高じて生物部に入部したところ、そこで待っていたのは昆虫大好きな顧問の先生でした。

生物部に入り、昆虫の研究を始めました。はじめは野外調査で採集してきた昆虫を図鑑と照らしあわせて名前を「同定」する、ということを経験しました。



そのなかではじめて専門的な図鑑で同定したのが、オジロアシナガゾウムシという虫でした。ほんの1cmほどなのですが、ゾウのような力強さとパンダのようなかわいさを備えた体つき、そしておもしろい名前にも心をつかまれました。あるとき、じつはこのゾウムシが身近にもいることを見つけ、それをきっかけに身近にいろいろな虫がいることに気づき、虫の世界への関心が高まってきました。

でも、生きもの全般が好きだったので大学進学時はまだ昆虫学者になろうとは考えてい

ませんでした。牛や馬、農作業を学べる学部だったんですが、研究室選択のときに高校のときの生物部のことを考え、「昆虫の研究をやりたい」と思ったんです。

昆虫学者とは？

大学の先生もいれば、博物館や各種の研究、民間の会社に所属する人たちもいて、アマチュアの方もたくさんいるのが昆虫学者の特徴です。日本昆虫学会に属する人は約900人、ほかにたとえばアメリカ昆虫学会は約7,000人です。4年に一度の国際昆虫学会議には約1万人が参加します。来年、2024年は京都で開催されます。

昆虫学者でもその専門はいろいろです。多くの専門の「分類学」以外では、生態学、進化学、農学というのがありますし、昆虫の身体の構造などを学んで人の生活に役立てる、というような昆虫工学もあります。ほかにも、いわゆる事件などがあったときに状況を特定するための法医昆虫学もあります。

なぜこんなに多くの方が昆虫に興味をもつのだろう？

見た目では「かっこいい」のも「かわい」いのも「おもしろい」のものもあるから、というのはあるかもしれませんが、なにより、

さまざまな種類の昆虫が身近に暮らしている、ということが大きな理由だと思います。名前がついているものだけで100万種います。たぶん実際にはその倍以上の種類がいるだろうといわれています。

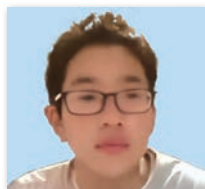
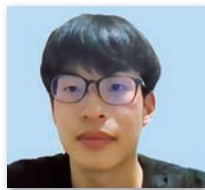
ちなみに鳥類は約1万種、哺乳類は約6,000種、両生類が約7,000種、爬虫類が約1万種、とされているので、昆虫の種類がダントツで多いことがわかるでしょう。

そのなかには、人の視点でいえば、「役に立つ」昆虫もいれば、「害をなす」昆虫もあります。アオムシはキャベツを食い荒らし、白アリは人間の家の木材を食べてしまう。蚊は人を刺しますしね……。それからにも悪いことをしないのに、カマドウマという虫は、気味が悪いといって嫌われますね。こういうのを「不快害虫」といったりもします。



逆に益虫といわれるものとして、たとえばミツバチがいます。おもにセイヨウミツバチが養蜂につかわれます。それから、絹を作るカイコがいますね。これは人が昔から「家畜」として飼育してきたもので、あまり動きまわらず逃げない、おとなしい個体を選んできたので、いまつかわ

10代とともに



れるのもおとなしいカイコなんですね。

害虫や益虫、また、どちらでもない虫にしても、昆虫は身近にたくさんいて人の生活とは切りはなせないものであるからこそ、多くの人が昆虫に興味をもち、昆虫学者への道を歩むことになるのかもしれません。

昆虫学者にむいているひと

じつはみなさんも昆虫学者にむいている可能性があります。さてここで、どんな人が昆虫学者にむいているか、お話ししましょう。

まず、生きものが好きなひと……昆虫学者にむいています。昆虫はさまざまな動植物と関わって生きているので、生きもの好きは必ず昆虫に出会い、その魅力に気づくはずだからです。

それから絵をかいたり写真をとるのが好きな人。研究したことを発信するためにはわかりやすいスケッチや写真を見せることもだいじですので、昆虫学者にむいています。

そして人の暮らしや環境問題に興味がある人もやはり昆虫学者にむいています。昆虫は森林や草原、川や池、公園や家の中など、どこにでもいます。つまり昆虫に関心を持つことは人の暮らしや環境のことを考えるのに役立つというわけです。

また、刺激的な日々を送りたい！ という人にもってこいです。虫はどこにでもいるので、意識さえしていれば、いつもの通学路でさえいろんな虫に出会い、観察し、考えるきっかけを得ることができるんですよ。

そしてなんと、昆虫が嫌い！ という人もむいています。なにかしらの関心をもっていうことです。じつは昆虫学者にも「もともとは虫が嫌い」だった人もいたりします。あの虫を根絶したい！ とか、なぜこの虫が…！ という気持ちから研究を始めたります。もちろんほかにも昆虫学者にむいている人はいます。いってしまえば、だれもが昆虫学者にむいているかもしれません

ん。それくらい人は昆虫に囲まれて暮らしているというわけです。

大自然の営みが足元でくり広げられる

大自然というと、ゾウやクジラやライオンなど、「弱肉強食の世界！」などと思いがちですが、足元にも昆虫たちの小さな大自然が広がっています。ここからは、わりと身近な昆虫を入口にその世界をのぞいてみたいと思います。



まずはセミです。

セミは樹液を吸うためにとがった口をもっています。じつはカメムシやアメンボ、アブラムシも同

じょうな口をもっています。これらはすべて「カメムシ目」の昆虫です。とがった口をもつカメムシ目には肉食と草食のものがいて、アメンボのような肉食のものは獲物の昆虫の体液を、アブラムシのような草食のものは植物の汁を吸っています。

アブラムシを食べるので有名なのはテントウムシ。でもじつはテントウムシにも草食のものや菌食のものなどがいて、肉食のものは鋭い牙が発達しているのに対し、草食のものは口に細かいギザギザの歯がついている、など、食べ物の種類にあわせて口のかたちも違います。

こんな感じで昆虫が何をどうやって食べるのかを考えながら昆虫を探すとたくさんの「ふしぎ」が見つかりそうですよね。

さて今度はスズメバチです。スズメバチの働きバチのなかには「働かない」働きバチが見つ



かることがあります。これはじつはネジレバネという昆虫に寄生されたことで働かなく

なった働きバチです。怖い話ですが、じつは昆虫の世界ではよくあることなんです。

スズメバチは「寄生される側」ですが、約15万種が知られているハチの半数以上は「寄生する側」の寄生バチです。そしてやはり、寄生バチでも「寄生される側」の昆虫の行動を変化させる現象が見つっています。たとえば、コマユバチという寄生バチが寄生したシャクトリムシは、ハチのマユをアタックしてくるアリから身体をはってマユを守るような行動をとるのです。

じつは昆虫の世界は小さな寄生昆虫によって裏から支配されているのかも……。そんなことを考えながら昆虫の世界をのぞいてみると、また違った発見があるかもしれませんね。

さて今度はカマキリに注目しましょう。昆虫には3対の脚がありますが、カマキリの前の脚は鎌状になっています。もちろん獲物をつかまえやすいかたちです。

同じ前脚でも、土の中で暮らすケラや、セミの幼虫の前脚はスコップのように平たくてギザギザで地面を掘りやすいかたちです。

このように昆虫の体にはそれぞれの暮らしに合わせた特徴が見られます。それは脚のかたちにかぎらず、昆虫の体に生えている毛でも同じです。たとえばミツバチでは、体毛は枝毛になっていて、幼虫の食糧にする花粉をまといやすくなっており、脚の内側の毛は付着した花粉をぬぐいにとってかき集めるためのブラシみたいになっているんです。

この体毛、昆虫にはみんなあります。カブトムシにだって毛は生えています。チョウの羽の模様も、鱗粉とよばれる、体毛が変化し



10代とともに



〈井手さんからいただいた色紙〉

たものです。感覚毛とよばれる毛には、触感や重力、さらには匂いさえ「感じられる」ものもあるんです。

昆虫の体のつくりを虫眼鏡や顕微鏡などで細かく見ると、よく知っているつमりの昆虫でも知らなかった「ふしぎ」が見えてくるかもしれませんね。

最後はアリです。地球上にはおよそ1京匹ともいわれるほどたくさんのアリがいて推定されています。これは1兆の1万倍という数字です。わかりにくいですね……たとえば人間が多めに見て100億人だとしても、その100万倍ということになります。つまり人とも出会いやすい昆虫というわけです。

たとえばヒアリやアカカミアリなどの外来アリは、人や物の流通にともなってやってきたもので、人の活動がなければ、外来アリとして問題になることはありませんでした。

昆虫はいろいろな形で人の暮らしと関わっ

ています。なかにはシロアリやゴキブリのように家の中に姿を現す嫌われものもいます。でも本来これらの昆虫は自然の中で暮らしていたものであり、森の中では枯れた草や木、落ち葉などを分解して、土にかえす「分解者」としての働きがあります。

嫌われている昆虫もどうして嫌われるようになったのかを考えてみると、意外とおもしろい発見があるかもしれません。

10代のわかものへのメッセージ

ぼくは大学進学時、研究者になろうとは考えていませんでした。「生き物」「なにかを調べたりまとめたりする」「写真をとる」「イラストをかく」などが好きでしたが、そうした「好き」のなかに昆虫が入ってきたわけです。大学生活の中で、その「好き」の全部を詰めこめるのが昆虫学者かもと思うようになり、昆虫学者になりたいと思ったんです。つまり将

来の夢が中高生のときにしぼれてなくてもいいんだと思います。みなさんもやりたいことをどんどんやっていくといいですね。きっとそれはどこかで生かされると思います。

それから……むりしてみなさんに昆虫が好きになってほしいとは思いません。ですが、虫だからといってひとくりに嫌いにはならないでほしいなと思います。昆虫は名前がついているだけでも約100万種もいますので、きっといい出会いもあります。その虫をきっかけに身のまわりのことに興味をもつと世界が広がりますよ。

(文責：編集部)

インタビューを終えて

〔取材協力〕東北のラボ・パーティ

飯澤寛美P、大友裕子P、長谷川珠美P(宮城県)、嘉藤朋子P、渡邊みゆきP(福島県)、佐藤八重子P(青森県)、田尻裕子P、小玉由紀P(秋田県)

飯澤寛美パーティ

●高宮 慧(中2) 竜也先生は昆虫学者だけど、子どもの頃は嫌いな虫がいたこと、昆虫学者は昆虫のことなら何でも知っているとってたけど専門があること、刺すハチと刺さないハチがいると知り、ひとつかしこくなりました。ハチが目の前を通っても安心できるようになりました。このことは友だちに話したいと思います。

大友裕子パーティ

●伊藤駿介(大1) 昆虫飼料の機能性にとても興味を抱いていて、どうやって昆虫はそれらを獲得したのか、またそれらは昆虫の生活環境の中でどのように活用されているのかに、興味があります。

長谷川珠美パーティ

●長谷川慶伍(大2) 昆虫の生態から井手竜也さんのバックグラウンドまで、親近感をもちながらお話を聞けました！ 井出さんが昆虫について語る姿勢を見ると、

人生をかけて没頭できるものがあるというのはすばらしいと思いました。昆虫に関して高校の先生からくわしく教わり、どハマリした。人との出会いが新たな自分をさらにひらいてくれるのだなと感じました！ 自分にとって人生を捧げられるものは何なのでしょう……？ ゆっくり見つけていきます！

嘉藤朋子パーティ

●渡部珠央(中2) 働きバチは働きつけて一生を終える。ちょっとだけかわいそうだなって思った。働きバチの中に働かないハチもいる。いずれ女王さまになるハチも出てくる。人間の世界からは想像もつかないようなことばかりでした。

渡邊みゆきパーティ

●馬場結梨花(中2) イラストや写真で、楽しく昆虫のことについて学べました。とくに印象的なのは、どんな人も昆虫学者にむいていることです。

佐藤八重子パーティ

●三浦悠音(高1) 昆虫がまったく好きではなく、興味もないような状態で参加しましたが、実際に先生のお話を聞いてみると身近な生きもののお話も聞けてとても興味深かったです。昆虫だけに限らず、身のまわりのさまざまなことに視点をむけ、気になったことはどんどん自分から調べ、知識を蓄えていきたいと思います。

●澁谷由介(中2) ぼくはもともとあまり昆虫が好きではなかったけれど、先生のお話を聞いたことで昆虫の話やその秘密に興味をもつことができました。この夏に参加するオレゴン国際キャンプでは自分から昆虫をみつけて調べてみようと思いました。

田尻裕子パーティ

●須藤寿莉(中2) 井出さんのお話を聞いて「虫にも毛が生えている」という点がとくに印象に残りました。ほかに、身近な昆虫でも「そうだったんだ！」とはじめて知ることが多かったし、ハチの巣の構造が人間の生活に役立てられているということにも驚きました。人間の生活にいいことをもたらす虫もたくさんいるんだと思いました。正直、虫って気持ち悪いし、嫌いだなと感じてはいたけれど、

虫に対しての自分の固定観念が変わった気がしました。

小玉由紀パーティ

●橋本航平(中2) ぼくは、お話を聞いて、まず鳥類や爬虫類が約1万種なのに対して昆虫類が100万種だということにびっくりしました。ハチの種類だけでもたくさんいて、そのほとんどはひとりで生活していることにとても驚きました。とくに今回のお話で、ネジレバネがハチに寄生すると働かないように操られ、そのおかげで次の年まで生き残るということや、ミズスマシの目が4つあるということにびっくりしました。わからないことをたくさん知ることができて、とてもためになったし、楽しい時間でした。

●小玉大佑(中1)「野生動物のいる自然」とは、アフリカとかのサバンナのイメージをもっていたけど、身のまわりに昆虫がいて、それ自体が自然なんだとわかりました。今回のお話を聞いて、夢をもつことのたいせつさがわかりました。いまもっている将来の夢が叶うかもわからないし、違う夢になるかもしれないけど、夢をもちつづけることがだいじだと思いました。

〔取材日〕2023年6月

2023
夏の訪問

PHOTO速報

今年もアツアツ国際交流!

この夏もラボ国際交流が実施されました。受入れ団体の人たち、ホストファミリーの方たちががんばってくださり、参加者のみなさんも勇気をだして挑戦をし、それぞれの「ひとりだちへの旅」をして帰ってきました。また、オレゴン国際キャンプはまさに「非日常」の体験の連続です。日本の規格をはるかに超えた巨大な木を見て、ふれて、感じ、砂漠や川や山などの大自然に心も身体もゆだね、アメリカの参加者とふれあい、大きな体験をしてきました。彼らの感動を写真で少しだけおすそ分けいたします。

北米交流 (アメリカ, カナダ)

日程 7/21~8/20

参加者 373名



受け入れてくれた人たち

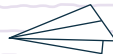
いっしょにやった



いっしょにわらった



それぞれの家族, それぞれのハグ

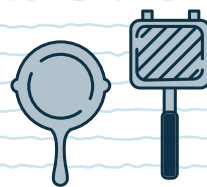


オレゴン国際キャンプ

日程 7/23~8/14
滞在先 オレゴン州
カリフォルニア州
参加者 26名

プログラム

- ハイク、動植物観察、カヌー、化石採集、寝袋泊、博物館見学など多彩な自然体験、野外活動プログラム
- オレゴン州と周辺州の中高生と交流できるプログラム
- OMSI (オレゴン科学産業博物館) の専門インストラクターが対応



韓国交流

日程 7/23～8/1
滞在先 ソウル近郊
参加者 16名

4年ぶりに再開したラボ・韓国青少年交流。受入れ団体である「社団法人韓国ラボ」の協力のもと、ホームステイのほか、韓国ラボ主催のキャンプにも参加。韓国のラボっ子と交流を深めました。



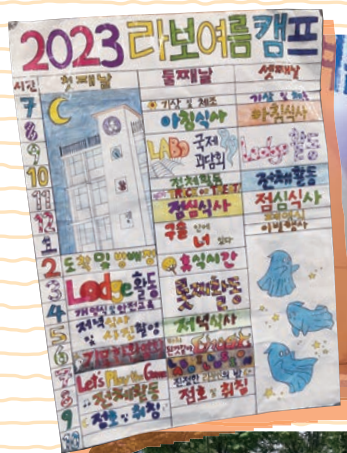
ホストファミリーと

韓国のラボっ子家庭に
ホームステイ



韓国ラボキャンプ

2泊3日のキャンプでは、
日本のラボっ子のテーマ活動や
特技披露の時間も



ニュージーランド交流

日程 7/22～8/15

受入校 Tauranga Intermediate, Tauranga Boys College,
Tauranga Girls College, Katikati College

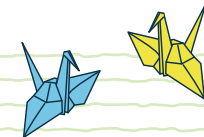
参加者 67名

4年ぶりに再開したニュージーランド交流。平日は学校に通い、週末はホストファミリーと過ごします。8月3日にはGate Pa Schoolという小学校でJapan Dayが開催され、歓迎の儀式のあと、ラボっ子はグループに分かれて習字や折り紙など日本文化を紹介しました。

学校生活



Japan Day



マオリ文化にふれる



ホストファミリーと



海外青少年受入れ

4年ぶりに来日プログラムが実施され、総勢95名が来日しました。受入れ家庭で、パーティで、キャンプで、来日者と交流が生まれました。

北米日本語研修

日程 6/17~7/14
参加者 21名

北米

日程 7/14~8/10
参加者 41名

韓国

日程 8/5~8/14
参加者 15名

ラングブリッジ日本語研修

日程 7/15~8/6
参加者 18名

食べて、遊んで



ラボキャンプで



日本文化を体験



2022-23 第35期ラボ高校留学 帰国



第35期ラボ高校留学プログラム参加者18名が帰国しました。1年間の留学生活でどのようなことを感じたのでしょうか。参加者の感想より一部抜粋してご紹介します。



コミュニケーションのすれ違いで部屋に1週間ほどこもってしまったことがある。きっかけは些細なことだったが、お互いうまく自分の気持ちを話しあえず、大きな問題に発展してしまった。正直その期間はだれにも理解してもらえなくて、ただいろんな人から怒られてばかりでつらかった。そのときはコーディネーターに仲介してもらい、少しずつコミュニケーションをとることができた。最後にはまた会う約束をするくらいになくなった。コミュニケーションは相手の気持ちをくみ取るだけではなく、自分の気持ちをこばにすることもだいじだと感じた。



とくに苦労したことは友だちづくりでした。学校にむかうバスの中で、1日3人には自分から話しかけようと心に決めてから1日を始めていたことを覚えています。いま考えてもあのときはたいへんだったと思うし、よくやったなと自分をほめてあげたいです。学校のだれも私がどんな人なのか知らないということが悔しくて、その一心で毎日チャレンジすることができたのだと思います。そうやって努力しているうちにだんだんと社交的になり、人に話しかけることが怖くなくなってきました。



誇りに思っていることは、多くの人とコミュニケーションをとることができたことです。この能力は、ラボのキャンプで身につけられているものだと思っています。学校では自分から話しかけて友だちをつくることができました。ほんとうにキャンプにたくさん参加してよかったと思います!! いいことだけではなくつらいことも経験した留学でしたが、どうだったかと聞かれたら、いつも「ほんとうに楽しかった!!」「いま、私にこの世界でできないことなんてなにもない気がする!! 無敵!!」っですぐに答えています。



2023-24 第36期ラボ高校留学 出発しました



第36期ラボ高校留学プログラム参加者15名が、アメリカ・カナダに出発しました。現地でのオリエンテーションを終えて、1年間の留学生活が始まりました。





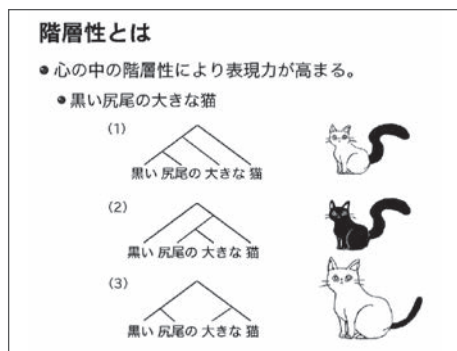
言語の進化 ～階層性と意図共有にもとづく仮説と実証～

岡ノ谷一夫（帝京大学教授／生物心理学者）

小鳥の歌学習、ネズミの情動発声、ヒトの音楽などから言葉の起源と進化を考える研究を進めている。近年ではコミュニケーションと意識の関連を考えている。

<当講座内容のご紹介>

人の言葉は「階層性」をもっている。たとえば、「黒いしっぽの大きな猫」といったとき、白い猫のしっぽが大きく黒いのか、猫自体が黒くしっぽが大きいのか、大きな白い猫のしっぽだけが黒いのか、の3通りの意味をもつ。このような曖昧性が生ずるのは、階層性の認知の仕方が異なるからだ。この曖昧性を解消するのが、「意図共有」であると私たちは考えている。私たちは、階層性と意図共有を手がかりに言葉の進化を考えてきた。



階層性は弓矢などの道具の作成技術や鳥の発声行動などにもある。例えば弓矢では、石器に棒をつけ、より遠くの獲物を

捕獲することができるように、単体のものを複合的に組み合わせて階層性をもたせることで進化してきた。また、シジュウカラ（鳴鳥類）は「ピ・ヂ」と同じ鳥が連続して発声すると、他の個体もふくめて天敵を威嚇する行動が起こる。別々の鳥がそれぞれに「ピ」「ヂ」と発してもそうした行動は起こらない。これは音の組合せが意味を変えることを示したもので、階層性の萌芽であるといえる。

言葉の他の側面に「意図共有」がある。ある研究では、オカメインコ（オウム目）にある歌を口笛で教えた。その後、人がその歌を口笛でふいていると、歌のメロディのちょうどよい切れ目で人と「合唱」という現象が観察できた。これはオカメインコが、人と「意図共有」し、途中で内的にメロディをうたい、その後、音として発したと考えられる。他の例として、ヒョウより弱いチンパンジーが複数個体でヒョウから獲物を奪う行動が観察された。このような行動も「意図共有」の萌芽であろう。

このように道具や鳥の鳴き声の組合せに、人間の言語と似た構造が見られること、そのような組合せを活用するうえで意図共有が必要であることがわかってきた。こうした研究を積み重ねていけば、言葉の起源に至る道筋が見えてくるかも知れない。

（文責：編集部）

新インターン紹介！

この秋、アメリカからやってきた新しいラボ・インターンをご紹介します。

Olga Tuttle（オルガー・タットル）



出身：オレゴン州

年齢：19 歳

趣味：絵を描くこと、読書、アニメーション、演劇、散歩、犬

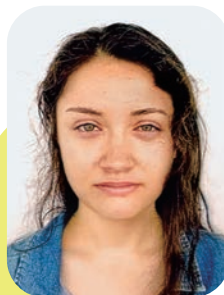
国際交流経験：

2017、2022 年にラボ会員受入れ

2018 年日本語研修・北米 1 か月プログラムで来日

配属：10 月～2024 年 1 月は神奈川支部／
2024 年 3～8 月は関西支部の予定

Savannah Yon（サヴァンナ・ヨン）



出身：アラスカ州

年齢：21 歳

趣味：ダンス、音楽、絵を描くこと、読書、裁縫

国際交流経験：

2017、2018 年にラボ会員受入れ

2019 年日本語研修・北米 1 か月プログラムで来日。チリと日本からの留学生受入れ

配属：10 月～2024 年 1 月は中部支部／
2024 年 3～8 月は千葉支部の予定

「違い」にふれて得たもの

岡村彩希

国家公務員



私はいまから10年前、中学2年生のときにアメリカのユタ州に、ひと月ほどのホームステイをしました。はじめて海外に行ったので、さまざまな「違い」を体感したことを覚えています。

現地の宗教上の習慣や美しい建造物、雄大な自然、野生の動物など、日本にないものとの出会いが数多くありました。店舗や住宅のスケール感も、時間の流れも、日本での生活とはまったく異なっていました。一方で、自分があたりまえだと思っていた日本食などの文化が、現地の人に受け入れられないこともありました。あらゆる場面で生じる「違い」にとまどったり、なかなか受容でき



ホストファミリーとハイキングに

ないこともありましたが、同時に「違い」を知ることはおもしろいと感じました。ホストファミリーはもちろん、出かける先で出会うすべての人が、自分を難く受け入れてくれたことが印象的でした。

私は現在、日本国内の機関で公務員として働いていますが、工作上、幅広い年代の人と関わるなかで、意思疎通がむずかしいと感じたこともあります。日本在住の外国人の方との出会い、話を聞くこともあります。出身国に限らず、年齢や育ってきた環境の違いによって、人それぞれ考え方や価値観が異なると思います。そういうときには、自身の感覚と違って、相手が異なる文化的背景をもつことに思いを巡らせ、それらを尊重し、むしろその「違い」を知ることを楽しみながら相手と向きあうようにしています。

私は10年前の国際交流のときに自分がそうしてもらったように、伝わりやすいことばを選んだり、表情や身ぶりなど、ことばに限られない

コミュニケーションをたいせつにしています。

もうひとつ、ホームステイで「あいさつのたいせつさ」を感じたことは、その後の自分にとって大きな経験だったように思います。ホストファミリーは、家族間でも、親しい友人とのあいだでも、出会って数日の私にも、常日頃「Thank you」を伝えていました。最初はその回数の多さに驚きましたが、すてきな習慣だと感じ、私も、英語を話せなくても、あいさつだけはきちんと伝えようと意識していた気がします。あいさつはあたりまえにあるように思えますが、いわれるとやっぱりうれしいもので、自分を受容してくれた、現地の人のあたたかさの根幹にあるような気がしました。以来、関わる人とのあいだで、ちょっとしたあいさつや声かけをすることを欠かさないう心がけています。

おかむら さき＝国家公務員
(埼玉県・渡辺 忍パーティ OG)

Information

国際交流親善事業

■第37期ラボ高校留学プログラム

選考試験

- ・9月 ELTiS2.0 試験 (オンライン)
- ・10月 ELTiS2.0 試験 (オンライン)、
面談 (オンライン、対面)

■海外からの青少年受入れプログラム

- ・ニュージーランド (43名を予定)
日程: 12月15日㊤
～2024年1月6日㊤
- ・第37期ラボ・インターン (2名)
日程: 9月末～2024年8月中旬

■4-H Board Members' Conference

(4H 交流代表者会議)

日時: 11月8日㊤ 17:00～18:00

■理事会・評議員会

- ・11月 上半期事業報告会

東京言語研究所

■理論言語学講座後期

※前期から開講講座2講座に加え、新たに8講座開催
日程: 10月2日㊤～
各講座 19:00～20:40 (100分)

■教師のためのことばセミナー (Zoomによるオンライン講義)

今年度は「気づき」の対象となる言語知識やその獲得・使用などについての講義を企画。小・中・高・大の先生以外にも、教員志望者、社会人など、いろいろな背景をもつ方々にむけ、理論言語学の最近の研究成果にもとづき、わかりやすく解説します。

- ・10月1日㊤

川原繁人 (慶應義塾大学教授)
※対談進行 亘理陽一氏 (中京大学教授)

「大人も子どもも楽しく学べる音声学入門～小学校での実践授業をもとに～」

- ・10月15日㊤
稲田俊明 (九州大学名誉教授)
「比べて分かることばの仕組みと意味」

- ・10月29日㊤
遊佐典昭 (宮城学院女子大学特任教授)
「理論言語学は外国語教育の役に立つのか?」
※各回 10:00～12:00 (10月1日のみ 12:40 終了)
※全体コーディネーター: 大津由紀雄 (関西大学客員教授)

◎くわしくは Facebook をご覧ください

Access <http://www.facebook.com/LaboJapaneseLanguageInstitute>